

「説明する」を軸に据えた授業の試み

山岸 律子
英語科 端崎 圭一
斉藤亜希子

1. 「説明する」を軸にした活動に関する基本方針

(1) 前年度の研究との関連性

平成 21 年度は、新学習指導要領に基づきながら、思考力・判断力・表現力を育成するために「習得・活用」を意図した授業実践を試みた。その際、「習得とは、授業において語彙、文法事項などのさまざまな知識を学び、繰り返すによりその学習内容を定着させていくこと」とした。一方、「活用とは、さまざまな言語活動を行う際に、既習の基礎・基本的な事項を用いて、場面・心情などに合うように自分の考えを表現すること」とした。

さらに、授業で行われる言語活動を以下の 3 つの段階に分けて考えて実践した。

段階 1：習得に重きを置いた活動

段階 2：習得と活用の両方が織り込まれた活動

段階 3：活用に重きを置いた活動

さて、研究総論にあるように、平成 22 年度は、全教科が共通テーマ「説明する」をキーワードに授業を組み立てることになった。しかし、これについては、平成 21 年度に取り組んだことと全く異なることを実践することを意味しない。授業の組み立てを「習得・活用」を軸に考えることも、「説明する」という具体的な言語活動を想定していくことも、生徒の思考力・判断力・表現力を育成するためにはどちらも大切なことである。「習得・活用」を軸に授業を考える時は、授業の組み立てをマクロ的にとらえるのであり、「説明する」を考える時は、ミクロ的にとらえていくのであると考える。実際に、平成 21 年度 11 月に公開した授業（2 年生は「宝くじに当たったらどうする？」、3 年生では「品物を売り込もう！（Flea Market にチャレンジ）」）は「習得・活用」を意図した授業ではあったが、その授業で行った活動は、「説明する」という活動としてもとらえることができる。

(2) 思考力・判断力・表現力などに関する本校生徒の実態

これまで述べてきたように、昨年度から、新学習指導要領に基づいて先行的に思考力・判断力・表現力などを育成する授業の試みを行ってきたが、生徒にそれらの力が十分に付いてきているとは言い難い。生徒は、パターンや答えが一つに決まっている活動は得意であるが、パターンが変化したり答えが一つではなかったりする活動になると行き詰まることが多々ある。臨機応変に発信することがなかなかできないということである。ただ、後者のような活動を嫌がるわけではなく、むしろ積極的に取り組むように見える。「暑い日、友人を泳ぎに誘う提案をしてみよう」という活動に取り組みせると、Let's swim. / Let's go swimming. / Shall we go to the sea? などの様々な英語表現を次々に考え出すなどの優れた所を見て取ることができる。この芽を育てていかなければいけないと考える。そのためには、新学習指導要領の本格実施までに、現在の試行的な取り組みを 3 年間の系統だった取り組みへと発展させたい。

また、次のような様子も見て取れる。3 年生で“Dogs are better than cats.”を題材にディベ

一ト活動をスタートさせた際、犬や猫の優れた点をまず日本語で考えさせたのであるが、なかなか自分の考えを述べられない場面があった。詳細は3年生の実践報告で述べるが、英語のみならず日本語でも自分の考えをまとめた形で表すことが苦手な様子がある。これからの国際社会で生き抜いていくためには、自分の意見を人に伝えていくことは重要な要素の一つと英語科では考えているので、本研究「説明する」の活動を通して、こうした様子を少しでも改善したいと考える。

(3) 現行学習指導要領との関連

ところで、「説明する」という活動は、英語科では新しい言語活動ではない。現行の学習指導要領では、「実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」という目標の中で、「言語の使用場面」と「言語の働き」を考えながら授業を組み立てることの必要性が謳われている。その「言語の働き」の具体的な例として、「質問する」「意見を言う」「ほめる」「描写する」など様々なものが挙げられているが、そのうちの一つに「説明する」が記載されている。

よって、今年度の研究は、「言語の働き」の一つである「説明する」に焦点を当てて進めているが、実際の学習活動の中では、「描写する」「意見・感想を述べる」など、他の働きを含む表現とオーバーラップすることが多々ある。これは、「説明する」という機能だけを厳密に切り取って活動することが、不自然な言語活動になると考えるからである。そこで、英語科での研究は、「説明する」を軸に据えた授業をもって行っていることを断わっておく。

(4) 英語科における「説明」の三つのステージ

広辞苑では「説明」を以下のように定義している。

①事柄の内容や意味を、よく分かるようにときあかすこと。

② (explanation) 記述が事実の確認にとどまるのに対して、事物が「何故かくあるか」の根拠を示すもの。科学的研究では、事物を因果法則によって把握すること。

これによれば、「説明」は、相手に「わかるようにときあかす」「事物が『何故かくあるか』の根拠を示す」ことになるが、外国語として英語を学習する生徒にとって、いきなりこのレベルに到達することは不可能である。「説明する」ために必要な語彙や表現を少しずつ積み重ねながら、このレベルまで届くように導きたい。実際に、現行教科書『Sunshine English Course』において教科書会社は、「説明する」ために必要な言語活動や言語材料を段階的に扱っている。

そこで、「説明する」言語活動を考える際、英語科では、以下の三つのステージを考え、授業を行っている。

【第一ステージ】

単純な情報の伝達レベルの活動(=電化製品の取扱説明のような一般的によく使われるイメージ)。5W1Hを伝えるなどの事実を正確に伝えるレベルの活動。事実の記述と言ってもよい。

【第二ステージ】

単純な情報の伝達をするだけでなく、根拠や自分の意見などを付け加えて、事柄の内容や意味を示すことのできるレベル。

【第三ステージ】

事象を分析したり、詳細に検討した結果を述べたりしながら、事柄の内容や意味を解き明かすレベル。自分の考えの筋道を語る高度なレベルと言ってよい。

それぞれのステージは、学年の発達段階に対応していると考えられる。学習した語彙や文型の数が少ない1年や2年前半までは、第一ステージの活動が多くなる。2年後半から3年前半くらいまでは第二ステージの、3年後半では、課題によっては第三ステージの活動に入ることができるのではないかと考える。

以上のような考え方で、以下、各学年で取り組んだ実践を報告する。

2. 1年の実践

1年生では、まずは多くの言葉をインプットし英語を使うことに慣れさせるということから始めた。「人やものの様子を表す言葉」(形容詞)、「得意なことを表す言い方」(名詞、動名詞)、「動作を表す言い方」(動詞)など、ワークシートを使って口語練習をした。最初は教師主導で、英語の読み方を全員で練習する。そして、日本語を聞いて英語に言い換える練習をする。その後ペアを作り、一人が日本語を、もう一人はそれを聞いて英語に言い換えるという練習をした。時間は1分間で、交代する。それを2セット行う。さらに単語だけでなく、文で言い換えをするというように、少しずつ難度を上げていく。たとえばA「背が高い」→B“tall”の練習をA「背が高い」→B“He is tall.”という言い換えをさせた。この練習をくり返した後、表現活動の時にはそれを使って自分の言いたいことを言う機会を与えた。

(1) Question Game

Question Gameでは、教師が二人の人物や二つのものを提示し、自分(教師)が答えとしているのがどちらかを、質問によって導き出す、というゲーム形式の活動を行った。たとえば「パンダ / カンガルー」というカードを提示したら生徒は“Is it big?” “Is it from China?”など、どちらかにしか当てはまらない質問を出す。それに対し、教師が“Yes, it is. / No, it isn't.”と返事をする事で正解を示し、次の回答者に移る。クラスを男女2チームに分け、どちらが一定の時間内でより多くの答えを出せるか競わせた。練習してきた単語や言い方を使って質問できるような問題を作った。たとえば「石川遼 / タイガー・ウッズ」の問題では、“Is he from America / Japan?”など、ゲームの直前に口頭練習をくり返した表現を予想していた。生徒達からは、さらに前の時間に習った good at を使って“Is he good at smiling?”など、独自の表現を用いた質問も出された。

(2)スピーチ活動

1年生では、全員の前でスピーチするという活動を二度行った。初めてのスピーチは、「自分の家族や友達を紹介する」である。前述のように20~25の形容詞や得意なことの言い方をペアで練習し、それを使って自分の家族や友達のことを紹介する文を作った。その後、写真を持ってきてペアの相手に説明し、それに対して質問を受けるという活動を行った。次に、その写真をテレビ画面で映し、それを見せながら全体の前で発表した。

This is my brother, Kenji. He is an elementary school student. He is from Tokyo. He is good at baseball. He is fun.

というような全部で5文程度の短いスピーチである。「声の大きさ」「アイコンタクト」「わかりやすさ」を意識させ、伝わりにくいと思われる単語や言い方については日本語で説明を加えるようにした。級友たちはスピーチを聞いたあと質問をし、発表者はそれに対し答えるという活動である。

二度目は一般動詞を導入した際、「なりきり自己紹介」(p. 104 ページ参照のこと)と称して、be 動詞と一般動詞を使った文で同じようにスピーチを行った。その際には、それぞれがひとり一人のスピーチに対し、評価をするようにした。観点は「声の大きさ」「アイコンタクト」「わかりやすさ」「happy 度」(発想の面白さ)についてで、3段階で評価し、ひとこと感想を付け加える。

この二種類のスピーチ活動から、自分のことを話したり、級友たちに尋ねるということへの関心と意欲の高さを感じ、そこから学ぶことの多さにあらためて気づかされた。

「家族や友達を紹介する」発表を終えた生徒の感想

- ・発表するとき、大きな声ではっきりと前を向いて話すということを意識しました。これからどんどん語句を増やしてまたスピーチしたいです。質問は2回だけしたけれど今度からはもっとたくさんしたいです。
- ・人を紹介するのに英語を使ったのは初めてだったので少し緊張しました。でも上手く紹介することができて良かったです。クラスの人やペットやお気に入りの芸能人、友達などを紹介してくれたので楽しかったです。すごく新鮮に感じました。
- ・質問するとき人にない場合の質問の仕方 “Is it —?” を知った。
- ・質問をすることで覚えられた単語もあったし、a や an の付け方も改めて確認できた。
- ・予想していない部分まで質問されるので、もっとたくさん単語を知っておくことが、大切だと思いました。
- ・発表の時にまちがえたおかげで、今はその文は言えるようになりました。
- ・自分の発表に関心を持ってきて質問で手を挙げる人が多かったのが嬉しかった。
- ・いつもより多くの人前で発表するという経験ができて良かったです。

(3) 「私は○○が…です」と答え、一文付け足す活動

“Which do you like?”と尋ね合う活動では、Which の導入の後、“I like ○○.”と答えを言うだけに終わらず、その理由となる文を一文以上言うようにした。このように自己表現の部分を付加したことで生徒の活動としては習得に活用の要素が加わっている。たとえば“Which do you like, summer, or winter?”という質問に対して、“I like summer.”と答えるだけでなく、その後“I like swimming. I like hot weather.”というように理由となる文を付け加えるのである。

授業を参観された先生方の感想

- ・Because など、まだ学習していないそうですが、好きなものの理由をよく考えて相手に伝えようとしていた。
- ・Which に焦点を当ててるのではなく、なぜ○○の方が好きなのか理由を表現するところが、生徒の思考があって良い。

(4) 「コミュニケーションテスト」

前期と後期に一度ずつ、教師による1対1の英語による面接を行った。これはひとり一人の理解とコミ

コミュニケーションに対する意欲を見るためである。15問の質問が書かれたワークシートを配り、前もって自分の答えを書かせておく。そしてペアでワークシートを見ながら質問と答えをいう練習をする。そして今度は答えを言う方は、何も見ないで言うように練習する。これを練習した後、二日ほどおいてテストをする。

このテストによって、複数形や冠詞の有無などに気をつけ、文で応答することを意識付けすることができる。また、“Who washes your clothes?”の、主語を尋ねる質問に対する“My mother does.” “I do.”などの答え方も覚えることができる。

(5) 「映像を見ながら説明する」

現在進行形の練習の後、活用の場面を作ろうと「映像を見ながら説明する」活動を行った。(p.105 ページ参照のこと) ペアを作り、一人はテレビを見られる位置(A)、もう一方はテレビに背中を向ける位置(B)に座った。テレビ画面でアニメーションの映像を無声音の状態で見せる。このときメモをとりながらどのように説明するか考える時間を3分ほど与える。そしてもう一度同じ映像を流す。Aはそれをペアの相手Bに英語で説明する。教師の手助けとして“Where is she?” “What is she doing?”などの質問を全体にする。Aの生徒たちの中にはそれに答えるように“She is talking with a man.”と、説明を続けることができた。その後、Aは自分の言った文を、Bは相手の言った文を思い出し、ワークシートに書く。それをBの生徒たちから順番に発表させた。“She has an orange on the head.”など、聞けばわかる文も、映像を見ながら自分の口からはなかなか出てこず、同じ立場の級友たちの文を聞いて感心するという場面が見られた。最後は席を元に戻し、全員で音の入った映像を観て内容を確認した。映像は3分程度のものである。

授業を参観された先生の感想

- ・ビデオを見て、それをナレーションする活動は生徒が興味を持ちながら学べる活動だと感じた。
- ・ナレーションをする際に現在進行形の文だけでなく、今までに習った英語をいろいろに活用して使わなければいけないところがよかった。
- ・生徒が自分自身の英語の力がまだまだ足りず、表現したくても表現出来ない感情を味わうことが、次への学習のモチベーションになると感じた。
- ・教師が途中で英語で質問していたので、それがヒントになり生徒は英語で表現しやすそうだった。
- ・前置詞の使い方が復習できていた。
- ・同じ映像を使って、2年・3年時に同じ活動をしたら、自分の進歩の具合が分かって良いかもしれない。
- ・こういった活動を年に何回かできるとよいと感じた。やり続けることで生徒はやり方が分かり、できるようになると思う。
- ・生徒同士で準備の時間に教え合っていた。(例えば、「おじさんてどうなの?」という質問に「manでいいんじゃない」など)
- ・時間があれば、もう少し多く答えの例文の確認とそれをリピートさせることができればよかったかなと感じました。

生徒の感想

- ・言いたいこと、伝えたいことをうまく伝えられずイライラした。相手が言ったことから物語を考えるの

が難しかった。

- ・自分が相手に伝えるための言葉選びが難しかった。相手の言っている文を8割ほど理解できたので良かった。現在形や現在進行形の文を言う練習になって良かった。
- ・まだまだわからないことがあり、くやしかった。二年生や三年生になったときにもう一度やってみたい。
- ・もともと英語が好きだったけど、今回のこの活動を通してより一層英語をしゃべれるようになりたいという気持ちが高まった。これからたくさんの表現や単語を覚え、そしてたくさんしゃべって話せるようになりたい。
- ・はじめはビデオを見て文を作るのは難しいし大変だと思っていたけど、やってみるといろいろと単語が浮かび上がってきて面白かった。
- ・話すのがすごく難しかった。文法的にはメチャクチャで、これでは海外の人に通じないなというくらい…。でもこれからもこういう機会を持ちたいです。話そうとする姿勢を忘れないでいきたいです。
- ・動画を見て英語で話すのは難しい。でもとっても楽しい活動でした。二年後同じ活動をしたらどうなるかな。
- ・聞く側としてもすごく難しいと感じた。そしてわからないことはすぐに調べておくとうこういうときにでも役に立つんだなと思ったので、私も日頃からそういうことをしたいと思った。

(6) 考察

「説明する」という行為に限らず、すべての言語活動でもっとも大切な要素の一つが「相手がいる」ということである。授業で言語活動を取り入れる際は「相手を意識して、相手の立場に立って話す」ということを意識するようところがけてきた。相手に「伝えたい」という強い動機が、学習者の意欲につながるということを実感した。

そういったことから習得する活動の場面においては他者との協働（ペア・グループ活動）を取り入れることで、アイコンタクトや声の大きさなどを自然と身につけることができ、効果的な練習となる。また、活用を意図した場面では緊張感を持たせる設定をする。全体の場で発表したり、タイムプレッシャーを与える、教師と1対1のオーラルインタビューなどがそれにあたる。

また、文法事項を定着させる上で欠かせないのが「反復」と「書く」活動である。一度使ったハンドアウトも、ファイルにはさみ、時間が経った後に使うようにしている。そして、口頭で練習したり、発表した文はノートに正しく書くように指導している。

1年生において「説明する」活動は、前述のステージでいえば第一ステージが中心であるが、みずからの気持ちや意図がこもった言葉を使うことにより、それは第二ステージの要素をなすものとする。また、1年生の最後に行った、映像を見て説明するという活動は、まさに現在進行形の使い方の活用であり、第二ステージの活動といえる。

(7) 1年の課題

1年生は言語材料や既習の文法事項が少ないから「説明する活動が難しい」と考えられがちだが、「自分が考えていることを相手に伝えたい」「わかってもらいたい」という意思があれば「〇〇はなんて言えばいいですか?」という質問がたくさん出てくる。そのときにはどんどん単語を与えていけばよいと思う。また、練習の段階でこちらから多くの単語や言い方を示すことも「自分ならこう言いたい」という気持ちを

喚起することがわかった。そして一文でも自分の意思を伝えることが言えれば、それは「説明する」活動に十分になり得る。今後は辞書を使って自分で自分の表現したい言葉を見つける力をつけることが課題となる。

今後は、そういった文を正確に書くことを指導していくことが大切である。冠詞や複数形などの細かいところにも気をつけて正確な文を書くことができることで、コミュニケーション活動への大きな自信となるからである。

また、相手に伝わる話し方、声の大きさや抑揚、アイコンタクトとともに、相手の話を聴く姿勢や相槌の打ち方などの重要性に気づかせ、今後の活動の中で評価を取り入れながら指導につなげていきたい。

3. 2年の実践

2年では、第二ステージに相当する活動で、思い出の写真を説明する活動を実践した。

(1) 思い出の写真を説明する活動

この活動は、Show & Tell の活動の一種として広く行われるものであり、教科書の活動としても扱われている。写真を見ながら、その写真がいつ・どこで・何をしているか等を補足説明するという点で、「説明する」活動として相応しいものであると考える。しかし、この活動を Show & Tell の活動として、従来通り、生徒たちに作文を書かせスピーチさせるには多少の違和感があった。なぜならば、写真を1枚持ってきて一方的に相手に説明するという場面は、普段の生活ではほとんど見られないからである。そこで、できるだけオーセンティックなものに近づけるために、この活動を以下のように想定した場面の中でおこなわせることにした。

生徒Aが生徒Bの家に遊びに行き偶然机の上に1枚の写真を見つける。その写真には、生徒Bが写っている。それについて、生徒Aが生徒Bにいろいろ質問し、生徒Bが応えることでその写真を説明する。

学習の手順は以下の①～④である。

- ①生徒A・Bの立場で、自分の思い出の写真について、それぞれの対話文をペアで作る。
- ②生徒A・Bの立場で、練習をする。
- ③発表するとともに、自己評価と他者評価を行う。
- ④対話文をもとに説明文を完成する。

対話文を考えさせるにあたって、上述の場面を想起しやすいように、ワークシートには4つの場面を記載し、場面が展開するように仕組んでみた。よって、この活動はタスク活動と捉えることもできる。4つの場面とは以下のア～エである。

- ア. 生徒Aが生徒Bを自分の部屋に案内し、生徒Bが部屋についてほめる場面
- イ. 生徒Aが生徒Bの机の上に写真を発見し、見せてほしいと頼む場面
- ウ. 写真について二人で会話をする場面
- エ. 生徒Aが生徒Bにお礼を言う場面

「説明する」活動については、上記のウの場面が中心となるが、ワークシートには、「何の写真なのか」「誰が写真を撮ったのか」「その頃、何歳だったのか」「写真の出来事をどう思うか」など、説明に必要な手がかりを載せておいた（ワークシートは、p. 106 参照のこと）。

さて、上記③の評価であるが、本年度、初めて「特定課題のルーブリック」を用いて生徒に

評価を試みさせた（使用したルーブリックは、p.106 参照のこと）。ルーブリックに関しては、『よくわかる学校教育心理学（森，青木，淵上：2010）』や『「活用する力」を育てる授業と評価（西岡，田中：2009）』を参考にした。

ルーブリックは主に教師が評価をする際に用いると捉えられることが多いが、生徒に用いさせている事例も少なくない。そこで、今回の活動では、上記②の練習段階でルーブリックを示し活動に臨ませた。というのも、ルーブリックを事前に示すことで、どんな目標に向かってパフォーマンスを行えばよいのかが明確になり、発表本番のパフォーマンス向上のみならず、練習段階の量・質が向上すると考えたからである。（生徒に示したルーブリックは、英語科資料巻末参照のこと。）

（2）考察

ここでは、「思い出の写真」という教材、生徒が対話文を考えていた時の様子、発表とルーブリックによる評価の様子、そして、子供がこの活動を通して学んだことの4つについて述べてみたい。

ア. 「思い出の写真」という教材について

一般的に、「この課題に取り組んでみたい」という気持ちを生徒に起こさせる教材を選ぶことは大切なことであるが、「思い出の写真」というのは、そうした気持ちを起こさせる教材であると生徒の様子を見ていて実感した。生徒は家庭にある数多くの写真の中から一枚の写真を選んでくる。しかも、その写真には自分が写っているという条件がある。人に自分を見られる心理。そこには、生徒の熱い思いが働くようである。その思いが活動に取り組む原動力になったと考える。また、写真の背景には、幾つかの別のストーリーが秘められている可能性があり説明する際に広がりが出たと思う。

イ. 生徒が対話文を考えていた時の様子について

ここが生徒にとって英語に関する学びの場になったのではないだろうか。前述したように対話文を考える際には4つの場面があるが、基本的にどの場面で用いる英語表現も既習の言語材料を用いることで表現できることが多い。しかし、いざ、ペアで対話文を考え始めると、既習のどの言語材料と表現したいことが結びついていないのかが分からないで教師に質問するケースが多々あった。代表的な質問には、以下のような時にどう言ったらよいのかというものであった。

- ・写真を見せてくれるようにお願いするとき。
- ・友人の隣に座っている人がだれかをたずねるとき。
- ・誰が写真を撮ったのかをたずねるとき。
- ・写真に写っている友人の表情が少し悲しそうだというとき。
- ・相手の言ったことに「それはいいね」というとき。

これらの質問には、個別にアドバイスを与えるとともに、生徒全員の作業を止めさせ、板書をして一つひとつの表現の共有化をしていくことを試みた。こうした過程の中では、別の表現の共有化もできることがあった。例えば、“Please show me this picture.”という表現を生徒に示すと、ある生徒から“Can I see this picture?”という表現が出てくる。“Who is the boy next to you?”を示すと、直接指さして“Who is this boy?”という表現はだめかとた

ずねてくる。短時間のやりとりであるが重要な時間であったと考える。昨年度の実践においても言えることだが、基本的な知識を習得できたように思われても、それを使う場面を与えると上手く使えない。上手く使えるようにさせるには、教師は習得と活用の活動サイクルをうまく設計しなければいけないとあらためて実感した。

ウ. 発表とループリックによる評価の様子について

まず、発表であるが、一つ一つの原稿は教師の目を通ってはいないものの、上述の共有化があつてか、英文には誤りが見られるもののコミュニケーションに支障を来たすほどのものはあまりなく、発表を聞いていて情報はかなり聞きとれる発表であったと思う。発表の際に、教師の支援として心掛けたことは、誤りの訂正をメインにするのではなく、次につながるような良い表現を取り立てて、生徒たちにその表現を共有化させていくようにした。以下がその例である。

- ・部屋を褒められたときに、1年の教科書で学習した“Not really.”を取り入れていたペアを評価する。
- ・質問に対して単に“I don't know.”と言わずに“Sorry, I don't know.”と言えたペアを評価する。
- ・ある地名が出たときに、“I want to go there too.”と相槌が打てたことを評価する。
- ・部屋を褒める時、単に“Nice room.”というだけではなく、“Oh, you have a nice bed. I like it.”などと付加的な情報を加えたことを評価する。

次に、生徒の発表や評価を見ると、かなりループリックを意識しながら発表を行った様子がうかがえる。原稿についていうと、原稿を見るか見ないかが生徒にとって大きな問題になる。大概の生徒は、原稿を見たがるというよい。しかし、今回の活動のループリックでは、原稿を見るのが到達目標に対してどこに位置しているかが示されているので、生徒は自分の力を判断して原稿を見るか見ないかを決めていた。また、以下があるクラスの女子の連続5人分の自己評価であるが、ループリックの項目がよく見てとれる。

- ・原稿→見なかった。アイコンタクト→60～70%くらい？情報聞き出せた。声→小さかったかも…
- ・声が小さかった。
- ・途中で途切れて、アイコンタクトまあまあだったから。
- ・原稿は全く見ずにできた。アイコンタクトをしっかりとれたけど、声が後ろまで届いていないと思いました。
- ・声が小さかったし、説明が分かりづらかったり、状況が分かりづらかったと思う。

エ. 子供がこの活動を通して学んだことについて

発表や評価が終わった段階で、この活動を通して学んだことを生徒に問うてみた。ループリックにある「原稿を見ない」「アイコンタクト」「5W1Hの情報」「会話のスムーズさ」「クリアな声」の重要性を学んだと答えた生徒はもちろん多かった。しかし、より感心したのは、ループリックの項目以外についても学んだ生徒が多かったことである。既習事項を用いることでコミュニケーションができること、感情移入の重要性、会話を広げる工夫の必要性、相手を意識し分かりやすく伝えることの重要性、そして、通じ合おうとする心

の重要性など教師が想定した以上のことを学んだようである。この授業の目標は、『既習事項を活用しながら「思い出の写真」を説明することで、コミュニケーション力を養う。』であったが、ある程度、その目標は達成できたように思う。以下に、生徒の記述の一部を載せておく。

- ・今まで習った文を上手に活用するだけで、こんなに幅広い表現やたくさんの回答ができてびっくりした。自然に英語が湧きでたりしないけれど、最初に「こんなことを言おう」と考えれば、本番の時は意外とすらすら出てくるから、意識すればできる。
- ・一部の人が、いつもしている生活のようにしゃべっていたので、感情移入したらよく伝わるということ。
- ・写真を見て質問してこたえるだけだったけど、自分の国の言葉だったら、こたえたあとにもう一回くわしく聞いたり反応したりすると思った。他のグループにそんな人がいたから大切だと思った。
- ・この発表で学んだことは、英語で書くのも難しいけど、しゃべることはもっと大変だと思った。だけど、楽しいことでもあると思った。それに言葉を伝えるためには、アイコンタクトを取り相手を意識することが大切だとわかった。長い文を読めたら達成感があったしうれしかった。
- ・英文を考えることのは、とても難しいことだったけど、いろんなとこを工夫したりして、会話したりするのはとても楽しいし、やり終わった後の達成感はとても気持ち良かった。
- ・相手や聞いている人に伝えることのむずかしさ。どうしたら相手にわかりやすく伝えられるか考えること。
- ・ただ質問と答えを繰り返すだけでなく、少し工夫してジェスチャーをつけたり、ちょっと加えるだけで、見やすくおもしろくなるんだなと思って、いいなと思った。それから、中学2年生で習った範囲で十分に会話できるんだなとも分かった。英語をスラスラ言えるようになれば、いいことがたくさんあることもわかった。分かりやすくする工夫が必要だと学べた。
- ・会話に原稿など必要ない。必要なのは通じ合おうとする心だ。

(3) 2年の課題

今回の活動を参観した同僚からの次のような意見をもらった。

説明で重要なのは、想像力だと思います。どう説明すれば相手が理解しやすいか、ということを考える想像力です。気持ちのこもった写真だと、説明がすごくナチュラルになるのが印象的でした。内容によって説明への意識づけが変わることがわかりました。ことばを知っているかどうかということだけではなく、説明しようとする精神が強いかどうかによって、説明がわかりやすくなるかどうかが決まってくると思いました。

説明する動機づけを鋭くついた意見だと思う。電化製品の説明書のような単なる事実の説明をする活動だけでは、生徒の意欲を引き出せない。気持ちがこもる教材探しが必要である。「説明する」に限らず、このあと、どんな教材選択をし、それをどう提示するかが大きな課題の一つであると考えます。

また、ルーブリックについて、国語科の同僚から次のような意見をもらった。

(生徒の) 評価にはノンバーバルな部分に関するものが多かったように思えました。数人しか見ていませんが、バーバルな部分と区別してはどうでしょうか。国語科でも音声言語で説明する時の要素についていろいろと検討中です。

「原稿を見ない」「アイコンタクト」「ジェスチャー」「声のクリアさ」などは、確かに説明することによって重要な評価項目ではあるが、これらは、説明する活動以外の一般的なコミュニケーションにとっても重要な項目である。しかし、「説明として適切な回答であったか」「説明として十分な情報を含んでいたか」「補足説明があったか」などのバーバルな面については、ループリックには盛り込んでいなかった。授業の目標に照らして、どのようなループリックが適当なのかの検討を今後も重ねていく必要を感じている。

4. 3年の実践

3年生は、自分たちの側の意見の正当性を証明するために、いろいろな例や具体的なことがらを用いて「説明」しなければならない「ディベート」を主に研究することとした。

生徒たちは、ディベートに慣れておらず、11月は3人対3人あるいは4人対4人のディベートができることを目標とした。ディベートといっても肯定側と否定側による立論、質問、反論を決まった時間、決まった回数、決まった順番で行うのではなく、相手の主張を聞いた後に自由に反論していく形にした。また、相手が反論出来ない場合には今まで発言をしていたグループが新しい理由を言ってもよいことにした。

次に、2月に個人対個人のディベートをすることとした。

(1) ディベートの活動① (3対3または4対4)

1. ディベートまでの準備

- ・日本語でディベートをする。
- ・生徒は、主張文の書き方を参考にテーマを支える3つ以上の理由を挙げる。
- ・理由を裏付ける事実やデータなどを準備する。
- ・理由を裏付ける文をより豊かで説得力のある文にするために、パラフレーズ(言い換え)の練習をする。
- ・ジャッジの仕方を学ぶ。
- ・教師は生徒のアンケートの結果によってテーマ別にディベートのチーム分けをする。
- ・チームでの主張の準備の前に、宿題として個人で主張のための英文を準備する。
- ・生徒たちはそれぞれの考えをグループに持ち寄り、どの根拠を誰が言うかを決める。
- ・もう一度自分の担当の理由についてのデータなどを調べ、資料があれば準備する。自分の主張の英文は覚える。
- ・相手チームの主張を予想し、それに対する反論を準備する。

2. ディベートの手順

- ・ディベートの前の5分間で相手と原稿を交換し、チームメートと反論の作戦を立てる。
- ・必ず全員がディベートで発言しなければならない。ディベートの間は原稿を見ることはできない。
- ・自分がディベートしていないときはジャッジになる。
- ・勝敗は、聞いていた生徒の多数決の結果を一票とし、それにJETとALTのそれぞれの一票を加えて決める。教師は生徒に勝敗のポイントを具体的な発言を取り上げて、説明する。

3. 生徒の感想

- ・楽しかった。
- ・またやってみたい。
- ・英語の力とは別に、自分から話す力が必要。
- ・調べてきたことを言えなくて残念。
- ・もっと調べてきたらよかった。
- ・している間に準備していたこと以外のことも考えて言った。

(2) ディベートの活動② (個人対個人)

指導の手順

1. ディベートまでの準備

- ・アンケートをとり、ディベートのテーマを各クラス2つ決める。
- ・生徒の希望を元に、3人または4人グループに分ける。
- ・生徒にテーマを知らせ、賛成・反対両方の立場でディベートできるように調べさせる。
- ・生徒は調べた内容を、英文にする。

2. ディベートの手順

- ・グループ内(3人または4人)でジャンケンをする。
- ・勝った人(1人または2人)はジャッジをし、残った2人がジャンケンをして勝った方が肯定・否定からどちらをするか選ぶことができる。
- ・第1回戦での敗者と最初のジャッジが第2回戦の対戦をし、第3回戦はまだしていない2人が対戦する。
- ・4人の場合は第1回戦でジャッジをした2人が第2回戦をし、第3回戦は第1・2回戦の勝者が対戦する。
- ・グループ内での対戦が終わったら、第1位から第3位(第4位)までを決め、1位グループ、2位グループ3位グループでもう一度ディベートを繰り返す。
- ・最後にテーマごとに、1位グループが2つあるので1位グループの1位同士の対戦をクラス全員でジャッジする。テーマは各クラス2つなのでクラス全員で2対戦をジャッジする。

3. 生徒の感想

- ・ディベートはとても楽しい。卒業までにもう一度やりたい。
- ・自分の考えつかなかった意見が相手から出てくる時などは面白かったし、ディベートというのは楽しいと思った。
- ・以前にやった時よりも私もみんなも上達していて素晴らしいと実感することができた。
- ・今回のディベートは、2つめのグループ(1位同士で集まったグループ)でのディベートがとても面白かったです。英語でここまで真剣に意見をぶつけ合うことができるとは!と自分自身にも相手にも驚きました。
- ・前に班でディベートをした時よりも、相手に自分の意見を伝えることができたので、良かったです。英

語だけど、普通の会話みたいに自然にできて（できた時もあった）、自分でもびっくりでした。

- ・あまり文法とか気にしすぎるとしゃべれなくなっちゃうなあと思いました。
- ・自分が言っていることがおかしいと思っても相手が分かって反論してくれたのでよかった。自分も分かったときうれしかった。
- ・今までは反論されても基本認めてしまう感じだったけれど今回は反論して他にも良い点も主張できるようになったと思う。

(3) 考察

ディベートを始める際に、相手の意見を聞いた後に自分の意見を言う活動から始めようとした。しかしながら、生徒は相手の意見を聞き、それに対して反論することができなかった。そこで日本語でディベートをし、意見を交わし合うことを経験させた。それでも生徒は、どうやればよいのか少し戸惑っていた。また論理的に相手に説明することが出来なかった。しかし、友人と意見を交わすということにはとても興味をもっていた。

上記から、生徒は論理的に説明するための方法を知ることが必要だと感じた。そこで、主張文の構造を指導することとした。主張文は生徒が考えを整理しやすいように、書く指導を主にした。序論、本論、結論の3つの部分から成り立つ主張文では特に本論を重点的に指導した。ディベートで自分たちの主張をより説得力のあるものにするためである。(pp. 153-9 中嶋：1997)

説明をする際には、生徒の説明が1文だけで終わることが多く説得力に欠けていたため、いろいろな表現で言い換えるパラフレーズの訓練が必要だと感じた。同じ内容でもいろいろな表現ができれば表現に深みが増し、説得力が増すと感じたからである。また同じ内容でも2年や3年で学習した表現ができれば表現者の個性が文に現れ、より表現力豊かな文になり説得力も増すと考えたからである。パラフレーズの練習の際の生徒の表現が下の例である。生徒は最初に、「あいつ、すんげえ足はえーげんて。」という文を様々な日本語の文で書き換え、その後それぞれを英語に訳した。

生徒によるパラフレーズ（言い換え）

He runs very fast.

He is a fast runner.

He is the fastest runner in his class.

He can run as fast as wind.

He runs like Bolt.

パラフレーズをするときに大切なことはとして、次の5点を指導した。

違う単語で言い換える

違う文で言い換える

1文を2文以上で言い換える

例を挙げる

分かりやすい英語で言い換える

生徒たちはお互いの表現の多様性から、同じことを様々に表現できることが分かった。また、その表現の多様性を楽しんでいたように思う。この多様に表現できる力が、小学校から英語を学び、中学校で3年間英語を学んだ生徒たちに必要な力ではないかと考える。

パラフレーズの指導の後、ビデオ（中嶋洋一の子どもが輝く英語の授業④）を見ながら、実際にてジャッジを試みた。生徒はディベートの様子をビデオで見ると、ディベートの進み方やジャッジの仕方を学び、より意欲を増したようだ。また、具体例を目標にそれ以上を目指して努力していた。ビデオは次年に参考になるので、撮影をし、良いものを見本にしていきたい。

いよいよ英語でのディベートの準備になるが、実際には宿題で原稿を書き、それを持ち寄ってグループで理由を厳選していった。ディベート後、生徒の感想に「準備不足だと思った」とあり、勝つためそして説得力のある文を用意するためには客観的事実を調べる時間が多く必要だと感じた。しかし実際は、調べてきた生徒の中にもディベートの場で資料を使うことができなかつた生徒も多くいた。

ディベートではいつも発言しない生徒や英語を苦手とする生徒も一生懸命活動に参加していた。これは、ディベートが本来相手に“勝つ”ことを目的にしているため、生徒たちは勝ちたいという思いから積極的に参加したと考えられる。また、グループ対抗だったことも他の生徒の迷惑になってはいけないという思いがあったのかもしれない。ディベートの途中で生徒が言いたいのに、英語で言えないという思いをする場面が数多くあり、悔しいと感じたようだ。時間切れの合図の後でも話続けようとするグループも多くあり、日本語でその後自分たちの意見の正当性をしばらく議論しているグループもあった。この何かを主張する、自分たちの意見の正当性を主張したいという意欲を掻き立てられたことは成果だったと考える。

ディベートの最中、生徒は原稿を見ることができず、このことが自分の知っている表現でなんとか伝えようとする大きな原動力になっていた。発表の際には、原稿を見ないことが生徒の力を伸ばすと再認識した。

また、生徒たちは聞いている時もジャッジをしなければならず、とても熱心に聞いていた。聞きあう、相手を理解するということが人間関係を築く上でもとても重要なことだと考える。

2月の個人対個人のディベートの準備の際は、一度経験していることもあり、授業で準備の時間するのではなく、宿題としてほとんどの課題を行った。しかし、11月の中間意見発表会では根拠を論理的に言えるようにしなければならぬと指摘があったため、その点に重点をあてて授業の中で指導した。生徒は注意しながら準備をしていたが、本番のディベートでは、論理的に意見を述べることには多くの生徒が苦労していた。ディベートは2度目ということもあったのか、生徒は自分の英語の力の伸びを実感していた。難しい文はパラフレーズしてなんとか伝える、伝えられると感じている生徒が増えつつあった。決勝のディベートはどのクラスにおいてもよいモデルや目標になるような秀でたもので、聞いていた生徒にとってもとても刺激となるディベートになった。決勝進出者にとっては、達成感があり、更なる学習への意欲となった。

ディベートには英語の力だけでなく、思考力・判断力・表現力につながる批判的思考力・論理的思考力・瞬発力が必要である。これは普段から答えが1つではなくじっくりと自分の意見を考えさせる活動などを積み重ねていく必要がある。また、根拠を論理的に表現することを常に意識させなければならない。それらは英語の授業はもちろん、他の教科や日常生活すべてで養われていくものである。

(3) 3年の課題

生徒たちにとってテーマに関する事実や自分の主観的な思いを伝えることで、根拠を述べているつもりになっていたことがあったので、筋道の通った根拠の示し方を指導する必要がある。

教師側の課題としては、教師自身がディベートの経験を多く重ね、的確に生徒の発言を取り上げて生徒たちがより納得の行く説明をできるようにしなければならない。

また、生徒はディベートについての自分の力を最初と最後で比較し、自分の力の伸長を感じているようだった。教師が評価する時には、ディベートでは英語の正確性にはあまりこだわらず、適切に反応しているかを中心的に観察した。生徒の自己評価と教師の評価は、共に詳しく研究できなかったため、今後生徒の英語力伸長のためのより効果的な評価の研究の必要がある。

5. 課題

平成22年11月に本研究に関する中間発表会を行ったが、その際、金沢大学の先生方や指定討論者の先生方から貴重なご意見をいただいた。まず、説明活動には限らないが、言語活動では生徒が表現したいと思う題材を取り上げることが重要で、そうすることで自分の考えも語れるようになるのではないかということ。次に、説明をする時、話し手だけでなく聞き手の態度を養うことも重要であるということ。三つ目に説明を漫然とさせるのではなく、根拠を加えながら論理的に述べる指導が必要であるということが課題として挙げられた。たくさんのご意見があったが、これら三つのことを今後の課題として次年度の研究につなげていきたい。

【参考文献】

森敏昭・青木多寿子・淵上克義編 2010 ミネルヴァ書房

よくわかる学校教育心理学

西岡加名恵・田中耕治 2009 学事出版

「活用する力」を育てる授業と評価 中学校 パフォーマンス課題とルーブリックの提案

藤井昌子／イヴァン・バーケル共著 1998 開隆堂

日本語・英語解説による 言語活動成功事例集

藤井昌子／スティーヴン・アシュトン共著 2001 開隆堂

日本語・英語解説による 続・言語活動成功事例集

中嶋洋一著 1997 明治図書

生徒が熱狂・教室が騒然 英語のディベート授業 30の技

バンブルビー&メディコム制作・著作 DVD

総合的な学習につながる 中嶋洋一の子どもの輝く英語 の授業④ 郷土・情報編

樫葉みつ子著 2008 明治図書

めざせ!英語授業の達人⁶ 英語で伝え合う力を鍛える! 1分間チャット&スピーチ・ミニディベート28

Class

Exercise For 現在進行形

B

1 相手の言っていることを聞いて、英文に書いてみましょう。どうしてもわからない文は日本語でもかまいません。

(She) Omochi likes Omochi

Her room is very small.

She is very happy

She likes to talk

She is watching us.

2 あなたはビデオを見て、「まかねる」のまこと(Makoto)のことを英語で表現します。まこと以外のことを表現してもかまいません。

例: Makoto is eating. His room is small. He has a lot of CDs.

Now He has a lot of books

He is walkin

He has a letter He is running

3 まとめて文に書いてみましょう。

He has a lot of books.

He is happy

He has a letter.

His face is blue.

He is walking

He is running very fast.

He is in the class room.

Teacher is scolding

4 今日の活動をふり返って感想を書きなさい。

自分で言いたいことはいくつもあが、英語に直すことができた。

とくに、どの文を使えばいいのかわからない人の気持ちを表すような単語を選ぶのが難しかった。

Class

Exercise For 現在進行形

A

1 あなたはビデオを見て「オモチちゃん」のオモチ(Omochi)のことを英語で表現します。オモチ以外のことを表現してもかまいません。
例: Omochi is eating. Her room is small. She has a lot of CDs.

Note Omochi is. Bill. おもちゃは 12分、11分
OK 12分。 11分

2 まとめて文に書いてみましょう。

Omochi is white. I don't know her.

She is dancing now. She is like Fran.

She on a plate. She is working very hard.

She is talking with old man.

She say "Would you like Yakimochi or Oshiruko"

She is flying. She respect. got of Omochi

She looked dream. so she slept.

3 相手の言っていることを聞いて英文に書いてみましょう。どうしてもわからない文は日本語でもかまいません。

Room has a lot of books.

Today is February 11th

Heart is Ring Ring

1 They are in the school's room.

He has has a letter for her.

He is like dark. He is working at after school.

4 今日の活動をふり返って感想を書きなさい。 He is running.

おもちゃちゃんのこと、声なしで自分書いた文と声ありの文章が、書きやすかったのがうれしかった。
まごのしかたは、自分の使ったことが、英語で使われるのは新鮮だった。

あなたはジャッジだ！



- ・理由を正の字で書いていこう。
- ・勝ったチームにむかってしよう。

	テーマ	肯定派	反対派	コメント (よかったところ, 勝った決めては!?)
第1試合				
第2試合				
第3試合				
第4試合				
第5試合				
第6試合				

1. どのチームが一番説得力があったらろうか。

メンバー _____
 2. どうして説得力があったらろうか。

名簿

ディベート アンケート

- ・理由のある論議にしよう。理由を正の字で書いていこう。
- ・理由のあるしるしを自分の意見を書こう。(Aは「賛成」、Bは「反対」)

トピック	A賛成	B反対	理由
・ゴミ収集を有料にするべきだ。 Collecting garbage should not be free.			
・本よりも電子書籍の方が良い。 E-books are better than books.			
・ネットショッピングの方が店頭でのショッピング (買い物) よりも良い。 Net shopping is better than shopping at stores.			
・日本の会社の公用語は英語にすべきだ。 People at Japanese companies should communicate in English.			
・高等学校や私立大学の金制度を中止すべきだ。 We should abolish the financial assistance system for high school students.			
・死刑制度は必要ない。 We don't need the death penalty.			
・男よりも女の方が儲けだ。 Being a woman is more profitable than being a man.			
・日本はTPPに参加すべきだ。 Japan should take part in TPP.			
・中学校は土曜授業をすべきだ。 We should study at school on Saturdays.			
・給食のほうが弁当よりも良い。 School lunches are better than boxed lunches.			
(自分の考えたトピック)			